

浄土

正月号



特輯
法然上人と現代

法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別郵便法第三五二号)
昭和三十一年十二月二十五日 印刷 昭和三十一年一月一日発行

第三十卷 第一号

正月号



月影のいたらぬ里はなけれども
ながむる人のこころにぞすむ

法然上人

—◇目次◇—

表紙 円空作 十二神将像

随想		(2)
新年雑感	 椎尾弁匡	(4)
〔特集〕 法然上人と現代		
法然上人と現代	 田村円澄	(8)
美作国誕生寺	 漆間正徳	(12)
「選択集」の成立とその影響	 鈴木成元	(14)
.....		
竜の字	 田中東竹	(7)
新年をむかえて (アンケート)		(18)
ハワイの正月	 藤花教道	(26)
諸国風土記 沖縄の正月	 高里芳江	(24)
朝鮮の正月	 李広淑	(24)
.....		
体験談 おロシヤの生と死	 赤尾敏弘	(20)
教区だより		(23)
表紙の解説		(25)
中国浄土教物語 慧遠大師と白蓮社	 牧田諦亮	(28)

年 新 賀 謹

総本山 知恩院

大本山 増上寺

法主 椎尾 弁匡
執事 長里 見達 雄

浄土宗 宗務所

宗務総長 小林 大蔵
教学局長 稲田 稔
総務局長 鶴飼 隆元
宗務支所長 新谷 寛応

浄土宗宗議会議長

栗本 俊道

浄土宗宗議会議副議長

稲岡 覚順

宗議會議員 蓮勝寺住職

柴田 敏夫

横浜市港北区菊名町

祐天寺住職 巖谷 勝雄

静岡教区華陽院住職
社会福祉法人 日吉町保育園長

堀田 良謙

光心寺

静岡県焼津市

大仏殿 高德院

明照幼稚園

清水こども園

隆崇幼稚園

芝幼稚園

衷中につき年賀欠礼

横浜市南区久保山

光明寺 白幡 憲佑

里見 達雄

大河内 隆弘

正受院

長谷川 良信

浄土宗

神奈川教区教務所

野村 宗春

法然上人鑽仰会

佐藤 密雄 宮林 昭彦

佐藤 良智 安居 香山

中村 康隆 佐藤 行信

村瀬 秀雄 水谷 哲雄

竹中 信常 佐藤 成順

勅題「紙」に寄す

岸

信 宏

(知恩院門主)

昭和三十一年度新年御歌会の勅題は「紙」と仰せ出されています。紙の発明が人類文化の上に如何に大きい功献をなしているかは実に計り知られざるものがあります。紙という言葉の意味は『言海』によりますと「書見の略か」とあります。書き記して置いて後々までこれを見ろという意味であると思われるます。印度では古くは経文などを貝多羅の葉にするし、支那では古くは竹や帛に文字をしるした為に「名を竹帛に垂れる」という言葉があります。我が国に於ける紙の製造年代をいまま詳かにすることはできませんが、我が知恩院所蔵の古写経のうち、外邦伝来のものは八種あります。

たのですが、今でも尚三位か四位をしめる古写経とのことであります。

「時処人忌」

佐 藤 治 子

(鎌倉大仏殿内室)

本邦の古写経として我が知恩院が所蔵してありますものは、奈良朝時代のもの四十四種、平安朝時代のもの十九種、鎌倉、足利時代のもの十二種を挙げることができます。その中で最も私の心を引かれるものは光明皇后の願経である『超日明三昧経』巻下であります。光明皇后の願経には三種あるとのことです。一は天平二年三月十五日、父藤原不比等の菩提のためのもの。二は天平十二年五月一日、父と、母の橘三千代との菩提のためのもの、三は天平十五年五月十一日、更に両親の菩提のためのものであります。今のは天平十五年のものであります。本文は写経生の筆による雄渾なる男性的筆致であります。奥書は皇后自身の筆による優雅なる女性的筆致でその中でも、「藤三女」と署名せられた三字が目立っているものであります。千年の古香を放つ黄麻紙の上に皇后の奉仏の信心と両親への孝心とが充ちあふれているのであります。

千年に香る黄麻紙の経

「時処人忌」(神林周道さん)の十八回目の法要が晩秋の鎌倉で行われました。俳句を作っておられ、俳友も多い所から、「時処人忌」として旧友が集り、故人のありし日をしのび、それぞれが旧交をあたため、法要の後お食事を共にし、おたがいに若き頃をなつかしみ、話はつきぬ一日でした。行雲流水の如き神林さん。定められた寺もなく、宗門の為に或いは個人の為、東に西にひょうひょうととび歩き、物質的にも淡々としていらした神林さん。小春日和の庭に三々五々と歩きながら、故人をしのんでいる時、ふと、「石露がきれいですね」「量のもみじが美しいなあ」などとあのサラリとした着流しの神林さんが出ていらっしやうそうな気がしてきました。盛衰に頓着しない神林さんをしたい、各方面から集まられて、毎年交替に各地で法要を

つとめる。宗教人にご立派な方々もいらした中で、友人・知人が集り、故人をしのぶ会が十八年も続くという事は、非常に珍しい事ではないでしょうか。

偶然にきておられた別の方々から、「何のお集り？」とたずねられたので、説明をしたところ「まあ、さすがに宗教に生きる方々ね、いまの世の中に、こんな美しいお話を伺えるなんて、なんとうれしい事でしょう」と感心していらした事をつけくわえます。

宗教人の一つの行い、言葉が一般の人にあたえる印象のいかに大きい事か、考えさせられます。

あのことろのお正月

村田 嘉久子

(女 優)

私はいくつになってもお正月が嬉しく、喜びますので、まるで子供みたいなどと、皆から笑われています。

暮からお正月へかけての、あのあわただしい風景。月日が逃げて行くのを追いかけるよ

うにせわしない日々。これは下町に生れ、下町に育った私にとって大きな魅力となつてゐるのです。

私の家は品川で先祖代々続いていた酒仲買問屋でしたから、大晦日の賑やかさ、それにお正月は年中行事の中でも非常に華やかで大らかなものでした。暮の二五、六日になると店にはつみ樽をするのですが『いろ娘』というのが売出された時などは、その朱色の入った奇麗な模様の酒樽を店一杯に百ぐらい積みあげて、それへ三つ四つおきぐらゐに『松本屋』と家号の入った提灯がかかげられ、夜など実に美しいものでした。

また大晦日には掛取りに行った番頭が、松本屋の印半纏を着た出入りの鳶の者に守られて帰って来ると、八畳十畳六畳の三間をあけひろげた座敷へお金を全部あけて、それぞれ區別をつけるのですが、なにしろその頃のこととして、一銭銅貨、二銭銅貨、お札やらのなかにかなりの十円金貨が混っていました。面白半分のわたしたち兄妹で、山のような銭のなかから金貨を拾う役をやらされていました。今の人には想像もつかないでしょうが、

後から後から掛取りの人が帰ってくるので座敷はお金で一杯、嘘のような本当の事でした。店にはまた火といつて鑪をたかせ、掛取りから帰った人はそこで暖をとり、大きな高張提灯はまるで昼間のような明るさでした。

こうした忙しい賑わいも一夜明あけるとひっそりと、店には大戸をおろして、番頭、若衆小僧にいたるまで、寝ていたい者は床のなかに、初詣りする者は寝ずに風呂に入ったのち、出かけていったりしていました。

不動様が信仰の私の父は、元旦は暗いうちから成田山へ初詣りするのを毎年のしきたりとしておりました。それぞれによそ行きの着物を着せて貰ったわたくしたちは、母から買って貰った大きな羽子板をもって、店の前で昼頃まで羽根つきです。

獅子舞の太鼓や、鳥追の三味線、万才の鼓の音に交って、あっちこっちで響く追羽根のカチカチという音が、じっと耳をすましていると今でも聞えてくるようで、ああ私たちは幸福だったな、としみじみ思う今日このころでございます。

新年雑感

——日露役後の私——

増上寺法主
文学博士

椎尾 弁 匡



昭和三十九年一月が来ました。私も馬齢八十九を数える事になりました。喜寿を祝われた時、長兄が八十四で歿したから、それまで生きるか、父が九十まで生きられたからそこまでゆけば米寿までも保つかもしれぬと答えましたが、それも去年のこととなりました。八十三までは自分の命であるように感じていたのだが、八十四からこちらは寿命は自分のものでなく、世の力だと感じ、医学・衛生学・保健学の発達で皆様のお陰であると思うようになり、他からは元気とか若返ったとか言われるのは、その考え方の変わった事によると思います。

私はこの頃、急に記憶が悪くなった。それは耳が遠くなくなったからと思う。十月十七日に須之部量学君が死なれたと聞き、子息はと言ったら、長男は工博で日立の技師、三男は外

務省参事官とわかったが、次男は「いんちき」と聞えた。いんちきとは何かと反問したら、第三者が次男はNHKに出ているのだと言われたのですと言ひ、三人が笑いあった。私の耳が老聾になって、NHKをいんちきと聞きちがえたとうわかった。行誠上人が耳だけ早く極楽に行ったと言われたように、学友大島泰信君、神林周道君なども、その仲間だと笑ったのであるが、その人々もすでに本当に極楽に行ってしまった。

かつて須之部君が、明治天皇の崩御後、竜ヶ崎中学にいたので僕の講演を求めてきた。全校生が一時間半の講演に感激して謹聴したのには驚いた。少年の宗教心教養にこの日の講演が適切だと評され、他県でも催されることとなった。法随君が三重県に引っぱっていった。宇治山田では神宮中心に演

説した。翌朝の伊勢新聞は、昨日、釈宗演氏の演説会があったが、それは一通りの仏教談話であつたのに、若い仏教者の神宮中心の演説は、全市民の聞くべきものであつたと前書きして、二面に渡る記事をのせた。それは後に山田市の各種施設を生むこととなり、私の明照会同志を得ることともなつた。宗門では皇恩報答、管長の公式参拝、同願会等を引き出すことになった。いまや、私は目は盲し、耳は聾したが、それによつて発音も不明瞭となつた。三種病人になつたからには、いよいよこの病人の往生の必要を感じる。

私の伝道は三十八年以前は尾張の法類寺院でやつた位であるが、七月東大卒業の新聞記事から、佐賀、和歌山、長崎等の各県で浄土宗が主催する会におもむく事となり、ついでに瀬高に立寄つた。筑場義定君が必らず瀬高に寄れと強要して死ぬまでその役を守らせたためである。

長崎講演中に広島事件が起つた。内容はわからぬが広教寺、五十嵐慈道君がすぐ来てくれとの電報である。支校以来の友人ではあるが、かかる急声には応じられぬ。まだ久留米等、十日余り予定がある。電報はすぐ来てくれという。何か事件に違いないと世慣れた筑場君は、九州の日定は繰替えて、三日間行けと云うので出向いた。迎えた広教寺には何等の設備もない。何事が起つたかと疑問に思った。住職いわく

「この席に師団長一人半来る」

「一人半とは誰れか」

「一人は師団長、半は副官、これはこの頃五重を受けた信者だから、聞き手ではない。」

「その師団長がどうした」

「奥さんが亡くなつたので問題が起つた」

「如何なる問題だ」

「今本人が来て述べる」

言い終らぬうちに座敷に入つた師団長は、

「この頃家内を失いました。長州の寺は浄土宗ですから仏式でする筈ですが、浄土に三の疑いがある。疑いのある浄土宗に家内を送れぬ。日本は神国だからまず神葬をして疑いはれたら仏葬をする」

「三つの疑いとはなにか」

「仏教では釈尊の仏たるはわかつておる。浄土の寺では釈尊をどこかにかくして阿弥陀だけを祀るのは何故か。第二に阿弥陀を超日月光仏と申す。夜でも西の方に仏光ありて電燈もいらねばそれも良いが灯光が必要である。十二光仏などは出鱈目である。第三には浄土宗ではなんというか知らぬが、ここは安芸門徒といわれる。その説教では我々は愚悪の凡夫である。いたずら者であるといわれる。いま陛下から二万の

兵をあずかって教育する身である。兵はいずれも国家の干城、股肱と頼ませられる人々である。しっかりやれといっても怠ける。それをお互いはいたずら者などといえはどうなるか？」

「はい、わかりました」

と早速答弁を始めた。対談終つて師団長は夫人の葬式のやりなおしをするといわれた。私は

「それは必要はない、師団長に信仰がなかったから起つたことだ。五重を受けて信仰を定めなされ、副官はこの頃受けられたそうだ」

「それではそれをやってくれ」

「いま私は三日間を限ってきたので出来ぬ。知恩院から誰かを招くよう帰東の際、吉水執事長に申し入れておきましよう。」

大正四年夏かと思うが、望月氏と私と真部氏と別府の浄土宗の講習会に出たことがある。將軍はその入信生活を語つたついでに、望月氏の講演や教区の講習に論及し、次の様なことを言つた。

「軍ではいちいちの演習に講評を行つて反省する。今のやり方はやりっぱなしである。これでは遊びごとで真剣になれぬ筈だ。椎尾氏の教えでは、私が師団長として講演するの

を、駄目だ。自分が高く師団長と留まつて、兵隊に訓辞するよりは、自分のやりぞこないを述べて注意を促せ」といわれた。とくに連隊長が母に帰宅中に念仏するなど言つたと聞いて、これ呼び出し、なぜ母の好み信ずることをさしとめたか。忠は孝に、孝は母の心に順ずると云うではないか。母とともに念仏せよと語つた。数日にして彼は、私に向つて泣いて感謝した。私も長年軍職にあつたが、これほど感激したことはなかった。まことに忠孝の心も正しき信仰の態度から出なければ行われぬ。そこに、この種の研究の重点があるのではないかと思う」

私は大正四年九月から毎月二十八日夜、福原男爵の宅で講話することになった。これは宮沢説成君と男爵とが来寺、懇請された為である。実は学位が出たから、学士時代より忙しくなり、その春から帝大にも出て、忙しいので渋つたが、福原越後の記念と男爵が一橋、早稲田に道德教育を引き受けたのと、特殊人と問答する会であるから出席を、というので承諾した。これがまた長州人と多くの関係を持つこととなり、時局伝道、国民覚醒運動、共生会ともなり、大正八年以来の朝鮮仏教に力を与え、九年満洲伝道となった。その影響は、代々の総督にも忠告することとなつたが、ついにそのことは戦争によつて、大部分無駄になつてしまつた。

天上より来りて地の果てまで、尽きることなく流れゆく河のほとりに、長い間動かない人影があつた。その男の名はツアン(蒼)。ホアン(黄)帝の史官である。ツアンは水面を見つめながらつぶやいた。

「わしには姿を見せてくれぬのか。」

ツアンは首をふりながら、この数個月の努力のあとを考えてみた。それは、春のある朝、帝前に伺候すると、待ちかねたように「昨夜、夢をみた。広い河の岸辺を歩いてみると、突然あたりが暗くなり、ものすごい水音と電光と共に、今まで見たこともない怪獣



が二頭も現れたのだ。そして驚く朕に

何か図のようなものを捧げると雲が垂れてきて、ぐるぐる回りながら、天に上っていつてしまったのだ。これは一体何であろうか」。

「わが君、その獣は古来伝えられているロンでありましょう。」

「あれがそうか。どんな文字で書くのか。」
「いえ、まだできておりません。この機会に考えさせてください。」

「よろしい。」ということからだった。

文字を作ることにくれた力を持ち、種々の名字を記したツアンもこのロンには弱りぬいた。シエ(頤)という史官と二人で、中国を巡り歩いて、ロンを見たという者を探して

龍の字

田中 東竹

は、その特徴をたずねた。その結果は、従来の動物とは異なるもので、全身に鱗があり、翼をもち、頭は駝、角は鹿、眼は兎、耳は

牛、首は蛇、腹はみづち、爪は鷹、掌は虎のような形で、身長はやや細長く、四本足である。色は黒、赤、黄といろいろで、深山大沢に住むとも言い、河池水中から現れたとも、雷雨と共に暴れたとも言う。が実際に見てい

ないツアンには文字

にし得る特徴がつかめず、ロンの現れた

という河のほとりに

来ていたのだ。

急に風の変化に気がつき頭をあげる

と、遠く対岸の彼方に雲が垂れ下がり、

一条の水柱となって

天空に吸い上げている光景が見えた。皆の言

う怪獣は見えぬが、まさしくこれだ。ツアン

は急いでシエのもとに行き、これを告げ、様

々な形の文字を書きあげた。その形は、角を

つけ、口を開き、あごひげをつけ、尾をはね

あげ、爪や鱗をつけ、全体を曲線で身を巻く

ようにみせたものである。

さっそく奏上したところ、帝は大いに満足

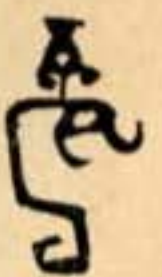
し、左右に披露した。或る者は、飛ぶ様がよ

く出ているとか、或る者は、とかげのように

変化するからこう作ったのとか、ツアン、シ

エの考えなかったことで賞するのを、二人は

くすぐったいような気持で聞くのだった。





法然上人と現代

田村 円澄

(九州大学助教授)

※

福岡市の東南部に油山がある。標高六百米ほどの山であるが、散歩のときに望むその姿は、京都の比叡山に似ている。

中腹にある油山観音の屋根が、晴れた日には、はっきりと見える。

鎮西上人が、学頭をつとめていた頃の油山には、東西に泉福寺と天福寺の二寺があり、堂塔をかこんで、多くの僧房が立ちならんでいた。天台を修行する若い学侶が、九州の各地から集まっていたのである。

鎮西上人が、新装なった明星寺五重塔の本尊を迎えるため、京都に上ったとき、法然上人は、すでに天台の比叡山を下り、東山吉水の庵室で、専修念仏の一行をすすめていられた。鎮西上人は、現に油山の学頭として、天台の学侶の養成指導に当たっているのであるが法然上人は、二十余年に及ぶ叡山での衆侶の在り方、また天台の学問そのものに心みたまれず、山を離れていた。さらにいえば、鎮西上人の指導の対

象は、天台の修学者・修行者であったが、法然上人の場合、これらの出家者のほかに、多くの在家者が加わっていた。学問と宗教、また閉ざされた世界での研究・教育と、開かれた世界での社会活動との対比が見られる。

※

およそ宗教が、個人の覚醒あるいは個人の救済を本質とすることは、いうまでもない。

釈尊の勤苦六年の修行も、釈尊自身の苦悩の解脱を目指していたのであり、そしてこの苦悩は、余人によって、肩がわりされうる性質のものではなかった。

自己の覚醒、自己の救済を第一に掲げる右の態度は、しばしば小乗的と評される。他人に対する関心や配慮が、欠如しているからである。しかし、宗教は、本来は個人本位のものである。「独生独死独去独来」の自分に気付くとき、宗教の世界への目が開かれる。あるいは、孤独に徹したとき、人間的自覚の一端にふれることができる。

しかし、ひとたび救済の喜びを味い、覚醒の喜びを体験した人は、その悦びと、悦びを与えた教えを、他人に伝えずにはおれぬであろう。

かくして釈尊の初転法輪が行われ、そして法然上人の吉水の化導が始められたが、しかし、その教化の対象を区別して取り扱うことはできなかった。老若男女・貧富貴賤の差別はもとより、出家者と在家者との間の区分もありえなかった。

如来の前では、すべての人間が被救済者であり、迷える群萌であった。

※

法然上人を評して、日本の宗教改革者であったとする見解がある。

中世における南都（興福寺など）や北嶺（延暦寺）のいわゆる旧仏教教団は、時の権力と結んで腐敗墮落の極に達し、しかもみずから改新するだけの能力がなく、ついに法然上人が立ち上り、肅正の旗を上げたのであり、やがて、道元・親鸞・日蓮などの鎌倉新仏教唱導者が続くのであると。

しかし、右の腐敗墮落という価値判断は、局外者の一方的偏見になりがちである。またこれをいうならば、およそ人間の歴史において、腐敗墮落を経験しなかった時代や時間は、

ないといえよう。いや、腐敗墮落を免れないのが、人間の偽らぬ相であり、そして仏教教団も、その例外ではない。

歴史の降下が、人間の世界の本質であることを示すのが、末法到来の教えであろう。

法然上人は、他の教団を云々する前に、執拗に解決を迫られる問題に直面していた。法然上人が求めたのは、自分自身の救済であり、他の教団の肅正ではなかった。

法然上人が、宗教改革者としてではなく、自己の魂の依所を捜して、わが道を歩みつづけたとしても、しかし問題は、法然上人を救った教が、やがて多くの在家者・出家者を惹きつけたことに関連している。東山吉水の草庵を訪れる人の数が増し、都の内外のみならず、遠く九州や関東・北陸にも、法然上人の名前が伝えられた。鎮西上人のように、天台宗の僧でありながら、専修念仏に帰入する者があらわれると、宗教は、個人の問題であることを超えて、社会的な意味をもってくる。

もちろん法然上人自身も、専修念仏の救済が、より多くの人に頒かたれることを望んでいられた。法然上人に加えられた後年の迫害は、避けることができなかったと考えられるが、とにかく法然上人の生涯は、「個人の宗教」が、「社会の宗教」に移行する一つの典型を示している。

※

編集部から与えられた題目「法然上人と現代」は、いくつかの意味にうけとれる。法然上人は現代に何を教え示すか、法然上人と現代を結びつける紐帯は何か、また、現代は法然上人に何を求めるか、いかに法然上人を現代に生かすべきか、など。

しかし、いうところの「現代」とは何か。それは多分、「現代の日本」であり、「われわれ」自身を指すのであろうが、「日本」といい、「われわれ」といっても、定型化し固定化したものではない。

太平洋戦争中は、八紘一字・承詔必謹の国体論が、日本の現実の支配原理となった。法然上人の教えも神がかった国体論的解釈を拒むことができず、また国体論的解釈を加えることにより、一応は済んだのであるが、しかし、現代の日本にはかつての「国体」に代るべき統一的な支配理念がないといえよう。

近世の日本仏教史を概観すると、浄土宗に限らず、ほとんどすべての仏教教団が幕府や諸藩の政治権力に結合し、またはこれに利用せられて、自己の保全を計ってきた。不受不施派のように、激しい弾圧を蒙った教団もあるけれども、これ

は例外であり、多数の仏教教団は、政治権力に迎合してきた。そしてこの傾向は、明治大正から昭和にまで及んだのである。

現実に対する指導原理は、教団の自主性により、その教理の内部から導かれるのではなく、「上」から与えられたものであった。

※

「法然上人と現代」というとき、その現代は、各人が直接している現代でなければならない。それは他人のものでもなく、まして他からおしつけられたものであってはならない。

その現代に立つわれわれが法然上人の法語を読み、また伝記を通して、法然上人と対話するところに、法然上人と現代との結びつきがあるのではなからうか。現実に処する指導理念の支えは、直接法然上人と対話することにより、われわれ自身が求めるべきであろう。

わたくし自身についていえば、わたくしは法然上人が辿られた自己凝視・人間内観の道に心ひかれる。自己直視は、いうまでもなく仏教本来のものであるが、しかし、日本の歴史において、法然上人は、自己対決を極限にまでおしすすめたたぐいまれな宗教者であった。

法然上人の立場は、自己直視による現実否定——罪惡生死の凡夫の自省および厭離穢土——に通じている。そして程度の差はあっても、現実否定を媒介とせぬ宗教はありえない。素朴的な現実肯定の挫折・破綻が、宗教の世界に通じる。法然上人の回心は、罪惡生死の凡夫としてひとたび死し、如来の本願に蘇るのであったが、しかし、ここに一つの問題がある。如来との関係において十惡五逆の凡夫に徹するのであるが、では家族に対し、隣人に対し、また社会に対し、つまり「現代」において、いかに処し、いかにみずからを対応せしめるべきか、という問は、なお十分に答えられていないように思われる。

もちろん、如来の救済に結びつく宗教の世界と、人間の行為の規範に関する道德の世界とは、次元を異にしている。道德は、現実の秩序に関連するが、宗教の領域は現実を超えており、従って、「現代」に対応する指導原理を、宗教の世界に求めることは見当ちがいである、とも説かれる。理論的に、この主張は正しいであろう。法然上人は、その多難な生涯を通じて、このことを実証せられた。しかし、近世以来の日本仏教史は、宗教が、政治・道德の支配下におかれていた事実を物語っている。

迎合でもなく、逃避でもなく、現実に立ち向うわれわれの

生活態度が、教理に基づいて確立せられなければならない。椎尾博士が、「社会の宗教」を説き、「共生」の大道を提示されるのも、一面ここにかんがみるところがあつてのことと思われる。

法然上人とわれわれの結びつきは、法語や、伝記を介する対話によってなされる。しかし「現代」の課題に答えるためには、小乗と貶されがちであつたけれども、やはり釈尊の言葉と伝記に立ちかえり、ここにわれわれの生活の原理・行動の規範を求めるべきではなからうか。「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし」という法然上人のお言葉は、実は究極の境地をあらわしているように思われる。もし、このお言葉通り行ふとならば、わたくしには不可能であると告白せざるをえない。それほど今のわれわれは、「現世」に拘束せられているのである。

法然上人の境地に到達する前段階で、蹉跎し逡巡しているのが、われわれの姿である。そして法然上人と、前段階のわれわれをつなぐためにも、ひとたび釈尊に立ち帰ることが求められる。「現世」に執着することの多いわれわれの、現世に処する積極的態度の確立は、釈尊——法然上人を通して可能となるであろう。

美作国誕生寺

漆間 正徳

(誕生寺住職)

兩幡の天降ります棕の木は

世にくちさせぬ法の師のあと

―蓮生作―

兩幡棕誕生寺とも称せられ円光大師二十五
霊場第一番札所、浄土宗特別寺院で栃社山争
土院誕生寺と号す。岡山県久米郡久米南町里
方八百八番地（国鉄津山線誕生寺駅西北八百
米）に位置し、法然上人御生家の跡に建立さ
れし寺院である。境内三千七百余坪ありて八
百三十年の昔、久米押領使漆間時国（法然上
人父公）が邸宅の蹟である。長承二年（一一
三三）四月七日法然上人が産声を挙げし処、
母秦氏君が御産屋に使われし室のあったとこ

ろが、現在の本堂御須弥壇の位置がそこであ
ると伝えられている。

法然上人（幼名勢至丸）は十五歳の春（久
安三年―一一四七）父公時国の遺言を守るた
め母秦氏君と生別され比叡の山に登嶺され、
出家仏道修行に精励された。只一筋に父公遺
言の達成たる憎愛共に救わる道、即ち憎みし
者も憎まれし者も、罪ある人も罪なき人も、
共に救われる道一途に、求法精進のためには
世の名利もろ共に打捨てての御修行の内に、
歲月何時しか流れ去って二十八年、父公時国
西帰の年と同年の四十三歳春三月に達して、
遂に選択本願の念仏を発見されるに至った。

茲に浄土一宗の創立となった時、今この世に
父母御健在であったならば誰さしおいてもま
ず一番に、この釈迦如来真法のお念仏のお教
えをお伝え申して喜んで頂けしものよと、世
の娑婆実相のはかなさを悲み給いて、せめて
もの追孝の料にとて如来大慈悲を頂戴せし今
の自分の喜びの姿を木像に留め、末永くお両
親の御魂の眠り給える故郷の墓近き辺りに置
かんとて、自ら刀を執りて刻ましめられたが
諸縁の成満を見ずして歲月いたずらに流去し
て御年六十一歳（建久四年―一一九三）を迎
えるに至った。時に熊谷次郎丹治直実出家し
て上人が弟子となり法力房蓮生法師と号す。
偶々上人が故郷のお物語ありし時、その役を
仰せつかりて蓮生法師上人が木像を背負ひ奉
りて都をあとに作州路に下向した。いまは住
む人もなく草生え戸の立てる上人が生家にな
どりつき、六十一年前上人が産声を挙げし室
に須弥壇を設けて木像を安置し、かつての家
来衆や親戚の人達で近在に居残りおる人々と
御協力なして邸宅を寺に改築をした。上人が
幼時のお守役であり父時国が家老職であった
稲岡栃之助の栃の字と、同人が妻であり上人

の乳人を勤めしお社の社をとりて山号楞社山とし、上人が弘めし御教えは浄土の教えなるが故に院号に収めて浄土院、上人誕生の地に建立せし寺なるが故に誕生寺と号したと寺伝は伝えている。おそらく当寺は建久四年を下ること数年にして創建されたものであらう。

境内には上人が十五才出家記念樹としての御手植の公孫樹（樹令八百年、天然記念物指定）御両親御廟たる勢至堂、三代目兩幡椋たる誕生椋の樹、源内定明が勢至丸に左眼を射抜かれて川水にて眼を洗って以来片目の魚が住むと云われる片目川、上人誕生の砌産湯を使用したと伝えられる産湯の井戸等ありて、八百年の昔を偲び物語る旧蹟がある。現在の伽藍は熊谷創建以来全て三回目改築であつて、本堂（元禄八年）、客殿（文政十二年）、庫裡（寛政七年）、阿弥陀堂（文政七年）、華頂殿（延宝二年）、勢至堂（安永八年）、宝物館（寛永八年）、山門（正徳五年）等であつて、誕生寺境内全域が法然上人誕生之地としての史跡指定になっている。又什物宝物には重要美術指定の釈迦像（漆間家仏檀本尊）縫仏三尊来迎像、大閻釜、上品下生阿弥陀如来

像、宝篋印塔、石棺、五輪石塔群等あつて、他には八百屋お七の小袖や法然上人関係の物



多数がある。年中行事法要で最大なるものは毎年四月十八、九の両日奉修される念式法要である。この法要の正式名は法然上人御兩親追思二十五菩薩天童迎接練供養と称せられ元禄十二年より現在の差定により毎年奉修さ

れており、浄土宗の一宗法要であつて現在では岡山県民族資料保護文化財の指定がされている。またこの法要は現在では宗教宗派を問わざる地方行事となつてゐる。

又寺内にて百名内外の宿泊が出来、五十人一度に入れる大風呂もあり、参拝一泊されて仏縁を結ばばこの世往生の砌には楽々と清浄に旅立つことができると古来より伝えられており参泊する信者が多い。宿泊設備の完備している関係上夏季に於ては戦後殊に各種団体の研修会場として利用され、上人が遺徳に浴する若き人々が近年とみに増加している。上人が御教えを仰信する浄土念仏の同行衆にとりては、上人が故郷はとりもなほさず同行衆の魂のふる里である。少なくとも一生に一度は上人が誕生の遺跡に杖を運びて八百三十年の昔、上人が御両親の家庭生活を回顧し、父時国公の御遺訓を想起して以て各自が信行策勵の一助とされんことを勧めるものである。

流れも清き吉水の

そのみな上や美作や

久米の皿山さらさらと

詣でて仰ぐ法の師のあと

「選択集」の成立とその影響

鈴木 成 元

(大正大学講師)

近頃いろんな学会で法然上人のことが取りあげられる機会が多くなった。そしてあらゆる分野から、法然上人伝にも鋭いメスが入れられ、ヴェールをはいだ人間らしい法然上人像が浮んできたことは、誠に喜ばしいかぎりである。

それと同時に法然上人の代表的著述『選択集』も再び脚光をあびるようになってきたことはいうまでもない。しかしこれらの問題点は、ある種の目的につかわれるため、曲った方向に行ってしまう、本質的な解明を忘れていることは歎かわしいかぎりである。

それはともかく、『選択集』は九条兼実の懇請によって撰述され、特定の弟子にしか授けられなかった秘伝の書である、というのが今まで語られてきた学説である。しかし私に

はそうは考えられない。九条兼実の懇請があったことは事実である。しかし『選択集』の撰述にふみきった法然上人の動機は、遺言状まで書いた法然上人の大病が最大の原因であったと思う。

お釈迦様が入滅すると、多くの弟子達が集り、生前に注意をされたことがらを編集し、それがいつしか厳しい戒律にまで発展していったように、法然上人の在世中はどんなことがおころうと、法然上人のもとにすれば念仏に関する疑問は解決できたはずである。ところがここに思いもよらないことが突発した。

法然上人はよく風邪をひかれたらしい。建久八年(一一九七)の暮にも風邪をひいた。しかしこれはすぐに治ったらし

い。そこで例年のように建久九年の正月元旦から別時会を行うことになった。この正月はとくに寒さが厳しかったらしく、早々に風邪をひかれた。しかしいつもの風邪と思って気にもとめず、別時念仏に専念した法然上人であったが、それが悪く、すっかりこじらしてしまい、高熱のために口はかわき、食事もできないで苦しむ状態が四月ごろまで続いた。法然上人自身はいうまでもなく、弟子達の全てがもうだめかとさえ思ったほどである。

何とか生きてもらいたいと願う弟子達は一生懸命神仏に祈禱をし、諸国をかけずりまわってあらゆる薬をみつけ出し法然上人のもとに運んだ。その中には日本の薬はいうまでもなく、当時としては誠に貴重な支那の薬まで入っている。このようなかいあってか、法然上人の病態は除々に快方に向い、四月の前半には手紙を書けるような状態にまで回復したが、全快したわけではなかった。

このように思いもよらない大病の法然上人を目前にみた弟子達は、誰しも法然上人なき後のことを考えたであろう。そしてぜひとも法然上人の在世中に、浄土宗の奥儀を作っておいてもらいたいという気運が強まり、『選択集』を要求する結果になってきたのであろう。建久九年といえ、法然上人の門下にもほんの少しではあるが、浄土宗の教義を勝手に解

釈し、自分の都合のよいでたらめを行うものがでてくるようになった。そこで法然上人自身も、はっきりとした教義を作らなければならぬという考えをもつようになっていたと思われる。こんな状態のときに、常日頃世話になっていた九条兼実からぜひとも作ってくれという、ねんごろな頼みがきたのである。こうしていろいろな問題がからんで『選択集』はできあがったのである。

こうして完成した『選択集』は九条兼実をはじめ、聖光・源智・隆寛・証空・親鸞などに授けられた。しかしその他の人には授けない秘伝の書であったという。なるほどこれらの人々に授けられたことは事実である。しかし私は『選択集』を秘伝の書とは思っていない。もっとも多くの人々に授けられたろうと思う。というのは、浄土宗僧侶として『選択集』は誰でもが知っていなければならないものであるからである。『選択集』が秘伝で、ただ数人の弟子に授けられたものなら、その価値は半減するであろう。秘伝だといわれる原因は、『選択集』の最後に、これを見た後は壁の中に埋め、机の上に出しておいてはいけなと書いてあることによったものである。字の通りに解釈すれば、他人に見せるなという意味であるから秘伝になるかもしれない。しかしその理由は、信仰のない人が読めば三悪道に墮るからだというのであ

る。だから信仰のある人が見るのはかまわないことになる。大体このような誠は、何も『選択集』ばかりでなく、当時の大切な本にはほとんど全部書いてある。つまり一種のきまり文句で、その意味は、大切に後世まで伝えてほしいということである。

ところがいくら法然上人が親切に教えても弟子達の受け取り方には相違がある。しかしその相違も法然上人が生きていれば何でもない。しかし法然上人が入滅すると自分なりに解釈するようになる。そのうちとくに前にあげた五人の人々が独特の解釈をするようになった。『選択集』そのものには少しも変りはないが、解釈が異なるために、自分だけとくに授かったというようになり、秘伝というところまで発展してゆくのである。

『選択集』は法然上人が入滅する建暦二年にはすでに版本となって出版され、沢山の本が世の中に出ていたと思われる。秘伝であればこんなことをするはずがない。これから考えても『選択集』は特定の人に与えたものではなく、門下の弟子達はもちろん、一般大衆の教化にも役だてようとしたことがわかる。こうして出版された『選択集』は大きな反響をよんだ。早速梶尾の明恵から再度にわたる横やりが入り、その後定照からも反論され、嘉祿の法難を招く原因にまで発展

する結果になった。こんなことが大きなしこりとなり、後世誤解を生む原因になって行った。

しかし、他宗僧侶による論難は、かえって『選択集』の普及に拍車をかける結果になっていったことは皮肉である。嘉祿の法難のとき『選択集』の版本は叡山で焼かれたというが、出版に対する熱意は増々強固になり、鎌倉時代には五回室町時代に五回、江戸時代に五〇回、明治以後今日にいたるまで三五回の刊行をみている。

これと同時におびただしい註釈書もできてきた。すでに鎌倉時代には三五種、室町時代に二四種、江戸時代が三四七種、明治以後が一四種という有様である。つまり七五〇年の間に『選択集』の発行は九五回を重ね、註釈書は五三〇種の多数に上っている。各宗とも宗祖の本を註釈したものは多い。

有名な親鸞の『教行信証』は三五〇種、空海の『十住心論』は一八五種、日蓮の『観心本尊抄』は五四種を数えるが『選択集』とは比較にならない。これらの数字を比較して論断を下すことは危険であるが、『選択集』の流布がいかに多かったかということはいわずけるであろう。しかも各時代を通じて様々な註釈書ができていったという事実は、『選択集』がいかに関心の多いものであったかということは申すまでもなく、難解なものであるだけに、それぞれの解釈に相違があっ

た証拠にもなる。これらの註釈書の内容は、それぞれの立場によってかなりの相違があり、一概に論ずることはできないが、ほとんどのものは、ある目的をもって以前の人々の註釈書に、更に註釈を加えていったものが多い。そこには過ぎ去った時代の背景は考えられるが、本質的にほり下げたものは少ないようである。

この中で面白いことは、浄土宗の一九七種に対して真宗の二六五種というように、真宗の註釈書が多いことである。そこには庶民層に深く入ってゆく真宗僧侶の熱心な心情が思いやられるが、西山派では三七種、天台宗では七種、日蓮宗・時宗が六種というように、他宗の僧侶による解釈をはじめ、三人の支那人や在家の人までも註釈を加えてえいることは見逃すことができない。もっと珍らしいことは、江戸時代の中頃になると、本文を延べ書きにして読みやすくし、一章ごとにその意をとって絵画を挿入した『通俗図絵選択集』と『和字絵入選択集』ができたことである。また謡曲の『選択集』もでき、観世・金春・金剛・喜多など共通に謡われたことは、当時の状態をよく物語るものである。それらの事実をみると、『選択集』がどのくらいもてはやされたかを推察することができであろう。しかし、これらは一朝一夕にしてできたものではない。そうなるまでには、いかにしたら民衆をつ

かんでゆけるかという、血を吐くような苦勞がともなったことを忘れてはならない。

生涯を『選択集』の研究に捧げた故石井教道博士は、法然上人七百五十年御忌の記念事業として、微に入り細にわたった『選択集全講』を出版され、研究の深さを披露されたことは近来の快事である。また服部英淳・竹中信常両博士も、それぞれの立場からわかり易く『選択集』の現代化をこころみられ、啓発されるところが多々あった。一方学界でも盛んにとりあげられて豊富な話題を提供していることは前述の通りである。

このように大切な下地は次から次へとできてきている。そして更に次の段階に進もうとしている現在である。ところが一部の人を除いた宗内では寂として声なしである。そして必要以上に教義の現代化、新興宗教対策などを叫んでいる。なるほど切実な問題だけに、それらを要求する心理はよくわかる。しかし切角苦勞して書かれた本は読まずに、叫び声だけあげて、学者に責任をなすりつけるようなことは片手落ちである。もっと本質的な立場に立って考えなければならぬ。これらの解決は、宗門一体となって勉強するほかに道はない。宗学・外道を問わず、学問の興隆とそれにもとづく実践こそが、残された課題であると私は考える。



新年をむかえて

1 新年度についてのご抱負

2 最近お読みになつて感ぜられた著書、論文等

3 最近のご身边で印象深かつたこと楽しかつたこと

◇ 内山 憲 尙

(駒沢大学教授)

1 抱負というようなものはありませんが八十二冊目の単行本を出版し、更に八十三冊目の原稿に取り組むつもりです。

巖谷小波先生の記念碑建設の準備のために働かせていただきたいと思っています。場所は許されるなら、増上寺さんの境内だといいがと考えています。

2 オールコック著の「大君の都」上・中・下三巻を読み、大いに得るところがありました。園部三郎著の「日本の子どもの歌」は新しい観点から、日本唱歌の史編をまとめあげたもので、よい勉強になりました。本多顯彰著「聖書」はある意味で興味深くよみました。

3 昨年九月十五日、つまらない本を八十冊書いたとて、東京でみなさんが祝ってくださって赤面していましたが、十一月十六日は大阪で、十七日は京都でも会を持っていたいて恐縮してしまいました。感謝のことばもありません。ことに大阪・京都の会は旧く珍

しい知友にお目にかかって、楽しくありがた

い集りでした。

◇ 恵 谷 隆 戒

(仏教大学長)

1 浄土宗教学振興の百年の大計を確立し宗門の人造り体制をすみやかに整理すべきであることを全宗門に呼びかけて、世論を喚起してみたいと思っている。

2 特別に感激した書物や論文はないが、全般的に仏教や宗門関係の最近の書物には、信仰生活を指導する良書のないことがさびしく感じられる。

3 最近、死の宣告を受けた病人から安心を得る読みものを与えてほしいと要求されて種々探索してみたが、何れも難解で、平易に記した信仰の指導書がないことを痛感した。

◇ 大 門 俊 我

(善導寺住職・浄土支部長)

1 法然上人の御教えが最下機の大衆を対象とされた様に、浄土も『より平易に、より大衆的に』をモットーに編輯して頂きたい。

然もその中に通る一本のスジ金を入れてほしい。

2 水野慈道師の『寺院生活』、一脉相通する過去の寺院生活を懐しく思い起すと同時に、将来に対する示唆をもふくみ、極めて興味深くよんだ。岸覚勇著『浄土主義と光明主義』、かねて知りたいたと思っていた光明主義を簡潔に知り得、然も浄土主義との比較により、宗義の再認識ともなった。

3 (一) 両隣りの真宗寺院が二ヶ寺揃って本堂を鉄筋コンクリートに改築する計画が進捗し、一ヶ寺は既に旧本堂をとりこわした。

この田舎都市にも時代の風潮を見、然もそれが出来る真宗寺院のあり方を見直す。(二) ベトナムの僧侶焼身自殺、続いてクーデターによる大統領そのたの自殺等の報、自身の無信を反省す。

◆ 栗本俊道

(浄土宗宗議会議長)

1 呼雲跳竜唯前進の宗門建設に、教学の展会と念仏の信仰を策励したい。仏教の理念を基調とする社会運動の推進で、仏教の現実

的興隆を實踐する。

2 全日仏時局対策協議会発行の ○創価学会の批判的解明 ○寺院の新しい社会教育活動 ○新聞雑誌等の時事論説その他

3 仏教興隆のため全日仏に時局対策協議会を設置し、総主事として企画立案推進にあたり、基礎をつくって、老大家諸師にバトンタッチしたこと。

◆ 小西甚一

(教育大教授・文庫)

1 Zen Buddhism and Japanese Literature というのを書くことにしています。あまり西洋人が誤解していますので。

2 福原麟太郎『チャールズ・ラム伝』日を平凡に生き続けることが、どんなにすばらしいかを痛感させられました。

3 別に。原稿が書きあがった時を『たのしい』とするなら、毎月二、三回は楽しい目にあっています。

◆ 竹中信常

(大正大学教授・文庫)

1 念仏実践

2 井上靖『風濤』

3 昨秋工学院大学祭に講演にまねかれ、学生たちの宗教への意欲を感じたこと。

◆ 水野隆樹

(華頂学園長)

1 (一) 今年と明年に、高校の生徒が激増するので、学校の教育内容が低下しないよう一段の努力をつくしたい。(二) 昨年度新設した高校の音楽科を強力に育成したい。

2 服部英淳君の『竜樹に於ける菩薩道の実践と念仏三昧』

3 部下の若い職員が七人も結婚して、毎日幸福そうに出勤する姿を見ると楽しい。

◆ 古谷道雄

(日本仏教保育会理事長)

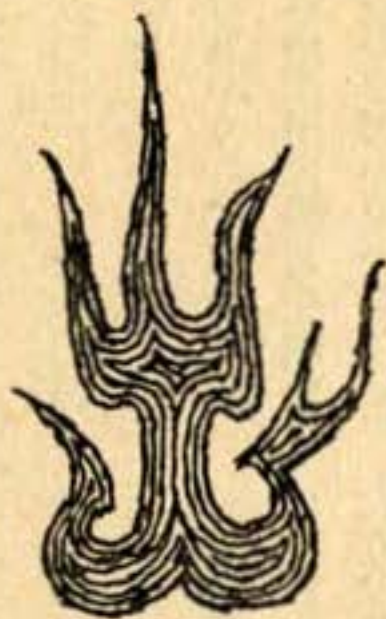
1 保育行政強化に対処する仏教者自体の質的充実の推進

2 『幼稚園からではおそすぎる』中修三

3 狼少年の如き三才児を一カ月ほどあずかったこと。

おロシヤの生と死

—抑留生活の体験—



赤尾 敏弘

(兵庫氷上農業学校教諭)
(称名寺住職)

終戦後、早や十八年も過ぎてしまった。「最早や戦後ではない」といわれる時期に、今更ソ連の抑留生活のことでもあるまいとも思う。

しかし、私にとってはあの抑留生活は忘れるどころか心の中に深々しみついて私の生き方を作り上げる上に大きな素因ともなっている。ましてや時々彼地に淋しく眠られた方々のことを思い出すと、ふと合掌したくなるような自分である。せめても冥福をお祈りするよすがとも思つて拙い筆を進めてみた。

今、生命あるは尊し

八月十日ソ連が日本に宣戦を布告したことを知らされたのは、北鮮豆満江辺、南陽の陣地においてであつた。それまでの一ヶ月半余り、山中に対ソ陣地構築をしていたのだから、予期

していた筈であるのに、ビーンとした厳しい切迫感と、どこか心の奥底に、「いいよいよお前は死ぬぞ」という意識が黒い重苦しさをもって沈澱して来た。大隊命令により、対戦車火器である私の小隊は、構築陣地を去つて前面第一線に配置された。

「敵戦車三十台、第二大隊前方七〇軒の地点より〇〇道路に沿ひ我方向に前進中、時速八軒」と聞くや部下の者達にサツと無気味な沈黙が走る。

その夜、暗闇を利して、黙々としかも大急ぎで掩体を作り、仮眠に入つたのは三時過ぎであつたろうか。我々の頼みの兵器、連射砲は三十七耗、到底当時のソ連車に歯が立つ代物ではなかつた。前面の銅板を貫通するどころか壁に豆鉄砲位のものである。払曉、急造爆雷が三十箇、連隊本部より届けられ、部下に一つづつ配られた。これで人間爆雷となつて破壊せよというのである。

「ええか。敵戦車は三十台、一ヶづつで戦車を擱座させるのだ。友軍陣地に一台たりとも侵入させてはならぬ。一人で一台づつ飛び込め。失敗するな。これか今生の別れだぞ。」

上ずった興奮の声が自分の耳に響く。腹に力をこめていったつもりだが興奮と虚勢に自分が浮く様な気持ちになる。

ああ。我が人生もこれで終りか。一瞬故郷の父母兄弟の俤が頭を掠める。えーいままよ諦めに似た落付をとりもどす。袈裟をとり出して大地にとっかかりあくらを組んで坐った。

その時である。後方から一台の軍用トラックがやって来るではないか。青い大きな旗が立っている。「何だ何だ」と叫びが起る。

「停戦協定成立、一切の戦斗行為を止めよ。徒らに刺戟するのを止めよ。無用の発砲を一切つしんで次の命令を待て。」

ああ助かった。ほっとした喜びと安らぎが一度にみんなの顔と口をほころばせた。それはむしろ不思議な感懐である。

「助かった。本当によかった。嬉しい。」

そんな叫びが、私の心をゆさぶった。

人間は誰でも生きたいのだ。命のあることがこんなに嬉しいものかと此の時程感じたことはなかった。後で聞いたことだが停戦がもう四時間も遅れていたなら、見事に戦車の餌食になっていたであらうと。

我が命あるは尊きかな。(法句経)である。

共同墓地のこと

ラーゲル(収容所)生活で一番気の毒なのは持病もちと老年の召集兵であった。ラーゲルではどうしても自分の利益が先立ち、「働かざる者食うべからず」のムードが立ちこめていた。重労働の割当は尚更のこと、とげとげしい雰囲気にもちていた。

係の人は頭をかかえて困惑していた。病人や老人は、物々交換による栄養の補給もつかず、寝ているか、窓の外を眺めているより外なかった。何時になることやら分らぬダモイ(帰還。)年とった人、妻もあり子もある人。思いはさまざまであった。それでも念願かな

って帰還出来た人は、苦しみも一朝の夢と化したであらう。しかし、抑留されつつ悶々の中に死んで行った人は全く浮かぶせないではないか。厳しい寒さと酷使、生命を支えるに不足がちの食糧、不自由な飲料水、それに伴う不潔さ、その中に故郷の夢や子呼びつつ、死んだ人の何と多かったことか。今思うに断腸の思いである。

死亡者がでると、同じ部隊にあった戦友が

七・八人、大きな四輪の大八車の様なものに載せて共同墓地へ埋めに行く。夏の埋葬はそれでも未だよい。冬の埋葬ともなれば全くお話にならない。零下何十度の寒さは、大地はまさに石だたみの様である。先の尖った鉄棒でコチンコチンと凹みを作って行く。大きな手套をつけて防寒服装での穴掘りは全く遅々として進まない。足ぶみをせねばこちらの足が凍ってしまふ。一時間に三人位で十糎も掘れようか。寝棺とは言え、それが又馬鹿でつかいとあっては、たとえ五十糎位掘ったとしても、とても埋まるものではない。地面から多少出ていても、その上に土? 氷を盛り上げる。私は僅かながら持参して行った沈香を焚いて一心に読経した。淋しい丘に塔婆も立てた。しかし二日もしない中に失くなってしまふ。見れば五、六十の土まんじうがならんでいるが一本もそれらしいものが見当らない。近くの農民がすぐ持ちかえって薪にするのである。

此の丘に眠る人々は夫々にどんな思いで死んで行ったのであろうか。やたらに多いシベ

リヤ鳥が騒ぎ立てる墓場であつた。戦後墓参りが許される様になったが、あのエラブカ（ソ連タタール自治共和国の小都市、ボルガ河畔、緯度は樺太北端と略同じ）の墓地へは誰か参られた人があるのだろうか。愈々帰還のときその側を通つて歩いて行つた私は、思わず心中で念仏した。遙かヨーロッパから東方日本の空を眺めつつダモイダモイと夢にまで見た人達の霊は今なおあの丘に淋しく眠っている。人が人を殺しあう戦争程みじめな非人間的なものはあるまいと今更のうちに泌々思う。

仏心、仏縁

エラブカにはラーゲルがAとBと二つあつた。将校、文官等約一万、人程が収容されてゐた。夏は毎日農作業、河港の荷役（ボルガ河港）原木材採、コルホーズの草刈、薪作り等々種々雑多の仕事に病人以外は狩り出された。中でも一番みじめな思いをしたのは、収容所職員住宅の便所掃除使役であつた。殊に冬の汲み出しはお話にならない。大小便がチカチに凍つて石の様になっていた。汲み出

し口から入つて鉄棒で突き砕く。かけらをスコップで外へほうり出す。これだけでも相当情なくなるのだが、作業中に上から飛沫が落ちてくる。悲哀を通り越して、くやし涙がながれ落ちた。

黒パンとカーシヤ粥の露命を支えるぎりぎりの食糧であれば、いつも出て来るのは先ず食物の話であつた。次が故郷の話。両親、妻子のこと。帰還後の考え。女の話。どん底にあえいでの生活ともなれば、人間みんな同じである。俱にこれ凡夫のみである。かつての部隊長や参謀、中隊長も終戦少尉も食物の配給には目を光らせた。食糧倉庫に生のジャガ芋を盗みに入つて営倉に入れられた鬚の少佐もあつた。俺のパンは小さい。誰が分けたと果はとつくみあう大隊長もいた。勲章も階級も人間の本性を浄化するのには何の役にも立つものではない。

反面こんな生活の中でも、古武士然として冷静を失うことなく、自分の心をじつとみつめて立派な態度に終始する人達もあつた。私の部隊長M大佐も、よく私に

「おい赤尾!! お経読んどるか。こういう

環境に入つとると一日一日を健康で悔のない日を送らんといかんぞ」と教えた。

収容所には戦友に抱かれて来た遺骨も随分あつた。ささやかながら、うす暗い地下室に遺骨安置室がしつらえられた。誰ともなしに、彼岸のおつとめくらいしようではないかという気持が沸いて来た。

僧侶出身の者が約三十名程集まり、形ばかりの祭壇を作り、供物や線香も少しずつもちよつた。それでも結構盛大な彼岸会が春秋に行なわれた。お経は各宗に通じ心経や舍利礼文で、収容所に時ならぬお経のコーラスが響くのである。その時のことである。Kという中尉がお供えとして現金十ルーブルを寄せられた。又日々の配給を少しずつ蓄えて砂糖を、罐詰の罐に一杯とか、煙草（バヒロスなる巻煙草）とかがよせられた。何れもこのどん底にあつて、尚お供えしようという仏心に外ならない。そんなことから仏教者の会合が度々持たれ、名もマハヤナ会と云うこととなつた。更にバッヂは、ということから緑色の羅紗を切り抜いて菩提樹の葉を作りそれに階

級章の星を一つその葉につけ、明の明星を象徴し、釈尊成道にあやかった。

当時のグループの一人であった足利市の三國浄春師は、ラーダの森にあった白樺の木を素材にして作られた阿弥陀仏像（抑留中の日展審査員山本雅彦氏作）の胎内に、二百十余柱の英霊過去帳を秘め、無事持ち帰られた。現在代々木西原町、雲照寺内にエラブカ仏奉讃会が作られたれ、抑留死歿万霊供養の本尊として讃仰されている。誠に仏心、仏縁は広く且つ永く何処にもあるものである。有難い思いに浸りながら毎日の生活にはげんでいる。

新年をむかえて（つづき）

桑原千代

（浄土会員）

1 南無阿弥陀仏々々々。浄土を拝読致しましてから十五年になりますがなにかにも残っていません。只おかげ様でお念仏だけ、いつでもどこでも申す様になりました。有難いこととございます。

教区

だより

諏訪福田会

渋谷賢応

ここ十年来、浄本両宗の相克は宗内活動を完全に麻痺させたことは周知の通りであるが、私ども諏訪の地に於ても例外ではない。むしろ地方寺院の活動は、各宗連合の地区仏教会に求められる。したがってここでは諏訪仏教会、即ち諏訪福田会のことを紹介することにする。

福田会の会名は勿論福田衣等の福田から出ているが、諏訪の地では仏教会と言うより福田会と言った方が一般にも馴染み深く親しみやすい。それ程その歴史も古く、先徳たちの活躍も盛んであったのである。

発会当時の先達丸山栄臨師は、昨年行なわれた創立六十周年記念式典に於て

「私どもの創立当時のことを思うと今の諸君にはとても信じられない程烈々たるものがあった。街頭布教、工場説教、日露戦争の際の慰問品など鉄道のない当時のこととて、馬

車に旗を立て、甲府まで歩いて行った。」と語っておられた。

私どもはそのあとをうけて、何とか努力を続けているのであるが、昨年度は二日間、諏訪市に於て山本洋一先生、摩仁清之先生による夏期仏教大学講座、担信徒総代会、安居香山先生による新興宗教についての研究会、会誌発刊などが行なわれた。

まだまだ活動が足らず、先徳の叱咤によってようやく動いているような次第で恥かしいが、それでも充分の努力は傾注しているつもりでいる。

昨秋十一月九日、井上恵行先生をおまねきして、檀徒総代教育を主眼とする講座がもたれた。

これからの仏教は宗を基とするタテ線だけではどうにもならない。各宗寺院が打って一丸となって立ち上ることとでなければ実際の活動とならない。

信念は宗によって培い、行動は宗我を捨てて大道に就くべきことを痛感している今日このころである。

沖繩の正月

高里芳江

諸国風土記

朝鮮の正月

李 広淑

沖繩の行事を語る事は、勢い古琉球の土俗を語る事になるが、これらの中には時代の変遷と共に、すでに滅びてしまつて伝説化したものもある。その消滅の度合は、都会地の那覇や首里に多く、地方農村や先島の宮古、八重山では今尚それが保存されている。

今では殆んど太陽曆に改まつた正月ではあるが、ただ僅かに糸満漁民だけが旧曆でやっている。海岸から運ばれた白砂が、庭や道にくまなく敷きつめられ、門松の緑が対照的で、それだけでも新玉る年の目出度さが感じられる。そこへ日の丸の旗を揚げると、南国の常磐樹の間で実に新鮮である。

知名士の家の玄関には、テーブルの上に琉球塗りの名刺受けの盆があつて、廻礼者はそれに名刺を入れる。一般家庭では座敷に机を並べて白布をかけ、山海の御馳走を盛った大皿と泡盛を入れた壺や燗瓶をのせて廻礼の客人を接待する。元旦でも暑いので、羽織袴で神妙に廻礼していたものが、羽織を脱ぎ、次の家では袴を脱ぎすて、酔つて家に帰る頃は、羽織と袴がちゃんと届いていたというのも島なればこそである。床間には福祿の掛軸をかけ、その前に若松を生け、仏壇には黄、赤、白の杉原紙を重ねた上に三重ねの餅を置き、上に密柑をのせておく、その側には五重ねの重箱の一番上に白米を盛り、中心に両端を紅白の紙で巻いた木炭と昆布を立てておく。木炭は健康、昆布はヨロコブの縁起らしい。

おもしろい話と言っても果しておもしろいかおもしろくないかは読んでみなくては解らない。朝鮮といつてもなかなか広く。その地方地方によつて色々風習は違ふ。これは一般に南の地方の話である。

先ず、若者は大晦日の夜、老人（目上の者）に

「過歳安寧に御過し下さい。」

と言う。明けて新年の元日を迎えると、若者は大変急がしくなる。その早朝（夜明け前）には先ず、玄関へ出て

「過歳安寧に過ごされましたか？」

と内へ声をかける。すると父母は

「過歳よく御過しか？」

それから親戚の目上の人々を訪ねて同じあいさつをしながら一まわりしてくる。まだ日は昇っていないから提灯をフラさげて歩き、空が明るくなる頃には各々の家に帰りつく。

元日は一般にどこでもそうであるように静かに過ごすものらしい。各自の家々では、正月料理をテーブルにきれいに飾りつけ祖先をお祭りする。そこには四代までの祖先の法事をする連中が集まり、両手を合せて中国式に礼を行う。それが終わると、本家、大本家へと法事する人々が集るのが夜の十二時になる。勿論これは男性のみの話なのである。

朝鮮は正月を一週間とし、三元日を静かに、残りをにぎやかに遊

表紙の解説

円空作・十二神将像

(愛知県鈍薬師堂蔵)

女の子は新しい下駄でマリつきをして遊ぶ。マリは蘇鉄の花の綿をまるめて、美しい木綿の色糸でかがったマリであったが、ゴムマリが現われてからは影をひそめた。

四日は前年の暮に昇天した火の神が再び降臨する日というので、主婦達は板線香をともしてカマドの前で神を迎える。また那覇の辻遊廓では、「二十日正月」といって有名な「犀類馬」の行列があり、板に着色した馬の首を帯にはさみ、紫の手綱を握って、蛇皮線や太鼓の伴奏で、ユイユイと掛声いさましく練り歩く。これらの行事は中国に源をおくもの、日本々土のもの、沖縄独得のものなど種々あるが、農業関係のものが圧倒的なので根源がどこにあるかと、中国や日本の農業社会の行事と一致しているものが多い。やはり同じ生産をする民族は同じリズムの中に生きているようである。

大宮市の薬師堂に「帰命 端的な例である。

頂礼薬師様 お前を見れば
十二神、飛驒のたくみが彫
りおいて、獅子に牡丹に竹
に虎 南無阿弥陀仏 南無
阿弥陀仏」という和讃が残
っている。飛驒のたくみと
はいうまでもなく円空その
人である。この円空仏がこ
の土地の民衆の生活のなか
に敬けんに生き続けている

ぶのが風習である。娘達は各々朝鮮服を優美に着こなし、自分の作文(巻物)を交換したり、軽いスポーツもする。その他は日本と同じような遊びをする。ただ違うのは、門松などはないことである。だから今日言われている新生活運動にはうってつけである。
又、綱引きというものを上の村、下の村と二手に分れてやる。それは雄・雌の綱でできており、町中持ってまわると一年中景気が良いとされている。
それを老若男女を問わず引くわけである。その時は楽隊(ドラや笛等)がにぎやかにはやし立てる。
何にしてもこの七日間を徹底的に遊ぶということは、とても良いことだと思ふのだ。

円空仏は柔和な姿と奇怪な姿の仏像と二様にあって、しかもともに拝まれてきている。奇怪な仏像は野獣的な、今にもたたりを受けると思われるような姿であるが、それをそのまま裏返してみれば、野獣的奇怪さは実は人間の中にこそひそんでいる。本能的にだけうごめき、自己のみにくさをさらけ出している姿。その姿を見たとき、人間は恥部にふれたかのごとくに陰そうとする。よい子になりすまそうとする。そういうずるさをそのま

ま、仏に投影したとき、奇怪な姿の仏像は自己の投影ともなり、すべてを投げ出す世界ともなる。円空はそれをたくみに農民の間でつかみ、人々の姿をうつし出したからこそ、いまに香煙のたえない息吹きが示されているのであろう。

十二支になぞらえた十二神将、とくに辰年にちなんでそのひとつをとりだしたが、一体私たちにそれがどのようなことだろうか。

(石上善応)

ハワイの正月

(ハワイ開教区浄土宗別院主事)

藤 花 教 道



大平洋戦争というものが無く、『危険性敵
外国人』という妙な折紙つき『満四年間』の
抑留生活が私の過去に無かったとしたら、三
十三回忌ならび、第三十三回目の布哇の正月

を迎えることになるんだが……と滅多に考え
ても見なかった事を、いま急に指折り数えな
おして見た。それは、法然上人讃仰会から、
「ハワイの正月と題して何か書け……」と注文
して来たからである。

さて、正月というコトバで思い出したが、
数年前のこと、日本で幾年かを過した一白人
が、日本および日本人を、自分の眼に映った
ままを書いて発表した中で

『日本人は、日本という自然美に恵まれた
国で育った精か、正直で、実によく働く民族
である。彼等が、かげひなた無く働く姿を見
たら誰でも信用するだろう。ただ、我々が見
て腑に落ちないのは、宗教に対する彼等の態
度である。』

日本人の多くは仏教徒だと言われる。それ
は、遠い遠い彼等の祖先から伝統的に受けつ
いで来た信仰と言えよう。その仏教徒として
の彼等が、歳末クリスマスの頃となると俄か
に基督教徒であるかのように見え、そして正
月が来ると、神道が彼等のもつ宗教!! と云
うように見えるのである。勿論これは、正し
い意味での宗教的信仰とは違うのかも知れな

いけれども、然し斯んな風に見えるのは事実
である。『……』と云う一節があつたのを苦笑し
て読んだことがある。

戦後の数年間、日本人の顔から明朗さが消
え失せていたことは事実であつた。だが然
し、それは日本人という民族が、本来、いん
うつな性質をもつ民族だ!! ということには
ならない。むしろ、其の逆であつたが為に、
思いもよらぬ敗戦の苦しみ突き落された結
果、自分で自分の為すべき術を暫し忘れてい
たところから、ひとときとはいえ自暴自棄的
な暗い影がその顔に顕れただけのこと。千数
百年に亘って日本民族の魂を培って来た仏教
精神は、近き将来、必ず芽を吹きだして、本
来の、明朗で而も活動的な性質を再び發揮す
るに違いない!! と私は解釈した。

果せるかな、欧米人の予想を裏切つて、日
本および日本人は、超スピードの勢いで旧に
復しつつある。海外の吾々も実に心強い。

歳末クリスマスの頃ともなれば俄かに基督
教徒である如く見え、正月が来ると神道が彼
等の宗教であるかの如く見える!! と白人の
眼に映るところに、私は、日本人独特の明朗

さがあると言えるのではなからうか？　と思
う。……それは、おまつりさわぎ（と言った
ら語弊があるかも知れぬが）が好きであるこ
とに加えて、心あらたに明るく立ち上ろうと
する日本人共通の為だと私は思う。

ハワイであろうと南米あるいは北米の何処
であろうと、日本人の移り住む時には必ず此
の日本人の気性が形にまで顕れて来るから愉
快である。『危険性敵国外人』の折紙を付け
られて監禁所の籠の鳥生活を続けている時で
すら、その鳥籠の中で『新年おめでとう!!』
の挨拶をかわし、『どうぞ相変らず!!』と新
年のコトバを交したものだ。来る年も来る年
も相変らず籠の鳥生活を強制されたら大変な
ことになる筈だが、然しそれでも此のコトバ
を平気で使う処に日本人の気性が見えると言
えよう。

ハワイの日系人は大多数が仏教徒である。
然しクリスマスが来ると其の殆どの家庭にク
リスマスツリーが飾られ、赤・青・緑と色様
々な電燈が点いて小供たちが喜び、大人も共
に喜ぶ。そして何れも『メリークリスマス』
の挨拶をかわす。然しこれは基督教に宗旨替

えしたわけではなく、シーズンのおまつり気
分を味わうと云うだけの話。そして此のおま
つり気分が一段落つくとき直ぐに大晦日が訪
れ、諸所方々の仏教寺院から除夜の鐘が響く
と同時に、物凄い爆竹や打上花火の騒音が街
全体を覆い包む。ハワイで此の爆竹が盛んに
鳴らされるのは支那人が移し植えた習慣らし
い。癩癩玉を破裂させたような物凄い音で鬼
気を払い、清々しい新年を迎える為だと言
う。

大神宮、出雲大社、金刀比羅神社など日本
で見ると等しいお宮が、布哇にも沢山建って
いる。此のお宮に初詣りする日系人が年と共
に増加する、と神主達が言っているのだから
ウソじゃなさそうだ。而も此の初詣りするほ
どの者は大抵みな、お宮だけでなく自分達の
お寺にも必ず初詣りする。お寺の納骨堂やお
墓にまでお詣りする。これは仏教開教使の私
がハッキリ言うのだから間違いじゃない。斯
くして夜がホノボノと明けそむる頃に『ハッ
ピーニューイヤ』の聲が到る処から聞え『新
年おめでとう』の聲が聞え、ホンノリ桜色し
た顔が見られ、日本国総領事館では堂々と門

松を飾り、皇室御一家の御写真を中心に新年
祝賀式を挙行する……と云う風な光景でハワ
イ日系人の正月気分がバツと開く。

昔の祖国を思い起す羽子板の音など全然聞
えない。然し日系人の家庭は何れも仏壇や神
棚に鏡餅を供え、玄関には梅や竹など飾る。
ホンモノの屠蘇をくみかわす家庭すらあるの
だからお雑煮を祝うなど常識となっている。
布哇には日系人が多いため、白人その他の人
種までが餅の味を知り数の子やカマボコまで
喜んで食べる。彼等は戦前、餅をライスケー
キ、カマボコをフィッシュケーキと呼んだも
のだが、近頃は其の物ズバリの名で呼んでい
る。日系人独特の斯の様な食物を異人種まで
が喜んで食べるハワイの正月、それは、仏教
徒の日系人がクリスマスのお祭り気分を喜ぶ
のと同様、一寸微笑ましい風景として特筆す
る価値があるのではなからうか。

何しろ人種のルツボと言われるほど、種々
雑多な色が溶けあって生活しているのだから、
正月風景も亦おのずから他と異なるものがある
わけ。兎に角文字通り和やかなのが布哇の正月
である。

慧遠大師と白蓮社

牧田 諦亮

(京都大学助教授)

(一)

物の実相を究めようとすれば、その物の中に入ってしまったえば解らなくなる、それから離れて眺めてこそ物の実相が解るとよく言われる。世上に「廬山に入って廬山を見ず」と言うのは、実はこのことを指したものである。廬山はシナ揚子江の上流、江西省九江市の南にあり、高さは一六〇〇メートル、周囲二五〇平方軒という、さして高山大山とはいえない山ではあるが、近くには面積二七八〇平方軒、中国第二の淡水湖である鄱陽湖があり、あいまって古来文人墨客の来訪する者が多い名山である。然し山に入ってしまうとその景勝の美はそこなわれる。廬山は儒仏道三教に縁の深い処で、周濂溪や朱熹の遺蹟として知られる白鹿洞書院とか陸修静の故

居と伝えられる簡寂観とか白鶴洞など道教の寺も多く、ことに仏寺にいたっては最盛時には三八〇所以上もこの山中にあったと伝えられる。この寺の中でもことに有名なのは東林寺、西林寺、大林寺などである。

今から二十九年前、昭和十六年六月二十四日、故林彦明大僧正を団長とする日華仏教研究会の第一回訪華使節団一行十一名はこの廬山に登り、東林寺に詣でた。その十二名中、今日になお生を得ている者はわずかに幡随院神林礼堂師、故山本玄峰老師随行須原秀文師と私の三人のみで、ここにもものみなうつりかわる世の姿を見る。湿気の多い六月の揚子江の船旅を続けてこの山へ来たのは、千数百年の昔、この東林寺に住した中国浄土教の祖師慧遠大師のお墓に詣でたい一心からであった。

廬山頂上の有名な避暑地で、今日では労働者の保養地として知られる牯嶺（一八九五年に此の地を開いた英人宣教師リトルが命名したもので、涼しいCoolからこの名が出たという）から、道幅三四尺、片側は幾百尺かの断崖となった急坂を西北に下ると東林寺に達する。今見る東林寺の建物は、慧遠大師創建というには余りにも貧弱であり、かつては長安の鳩摩羅什教団に拮抗した往年の廬山仏教の統領、念仏結社白蓮社の祖師慧遠の墓所としても頗る簡にすぎる嫌いもある。

在山三十年、遂に一度も山を下りず、人を送るにも虎溪をもつて界としたという小川もはや今日ではそれが何処にあるかは定め難い。寺の本堂も荒廃していた。それでも「虎溪聚三人、三人三笑話」「蓮池開一葉、一葉一如來」の聯にも、架空のことではあるが仏儒道三教一致の話柄を示す慧遠・陶淵明・陸修静にからむ虎溪三笑の逸話や、白蓮社ビフレンソツヤの名の起こりである寺前の浄池の故事を思いおこさせる。寺の西方ややはなれて「晋慧遠祖師塔院」の碑に続いて、箱に屋根といていいほどの正確な四辺を持つ、磚をつみかさねた白壁の小屋がある。正面に縦五寸ほどの花窓があり、ここからうすぐらい中を窺えば、まさしくこれが慧遠大師の塔墓である。八角型の台の上に石を集めて塔身を造り、高さ約九尺周囲二十数尺の饅頭型、専門的に言えばインド式の覆鉢型の塔があ

る。東晋の義熙十二年（四一六）八月六日、中国浄土教の祖師と仰がれる慧遠大師は八十三才をもってここに円寂された。それから星移り年変り実に千五百数年の長い年月を経て大師の墓塔は嚴とし肅として眼前にある。私は三十年後の今日もなお、慧遠大師の墓前にぬかずいたあの日あの朝の感激を忘れることはできない。

（二）

慧遠（三三四—四一六）は北シナ山西省西北部の雁門の貧しい家に生れた。家柄も良くなく、祖先や親戚に著名な官吏学者を持たぬ彼が、少年の頃に郷里から洛陽に出て儒学や老莊の学に興味を持ち勉学を続けるには大変な困難があったとは容易に想像できる。二十一才になった慧遠は弟の慧持（三七—四一二）とともに、胡族治下の北シナの戦乱を避けて、南方の漢民族の王朝（東晋）の治下でゆっくり勉学したい希望を持って、山西省と河北省との境にある太行恒山に向い、たまたまそこで清浄は沙門の生活を送っていた当時四十才の道安（三一四—三八五）に会い、これから約二一—五年に及ぶ道安慧遠の師弟の生活が始まるのである。

一人の僧道安と半人の儒者習鑿齒を得るために太之四年（三七九）前秦王苻堅が十万の大軍をもって襄陽を攻め、道安らを獲て長安五級寺に住せしめたことは歴史上に名高いエ

ピソードである。その道安から主として般若の空の教義を学んだ。また道安の厳しいまでに清らかな僧侶としての日常生活も、当然若い慧遠に大きな感化を与えずにはおかなかった。

インド仏教の発展が小乗から大乘へと時代を追っているのに対して、中国の仏教はともに「仏説」と冠した大小乗の經典を、同時に一仏陀の教説として受容しなければならぬ立場に追いやられたのであり、道安も慧遠も最初はその立場から仏教を学んだ。しかし後に龜茲国の大乘仏教のすぐれた宣布者鳩摩羅什（三五〇—四〇九）が長安に招致されたことから、北シナの仏教界は般若を中心とした大乘仏教が全盛となり、晩年の慧遠もその影響下におかれることとなった。しかも当時の中国の知識人の間によく行われていた老莊の学を、慧遠が晩年まで放棄することがなかったのは、慧遠の周囲に多くの在俗の知識人との交友を益すこととなった。もちろん慧遠自身は老莊に傾倒したのではなく、講經の時にはかえて莊子を引いて論敵を破ったとも伝えられるほどである。彼が久しく中国伝統思想の研究をすてなかったことも、それによって仏教の優越性を証拠づけようとしたものにすぎなかった。慧遠が礼敬問題といわれる沙門と王者、仏教と政治権力との関係や、人間の道德的行為の善悪と现实生活における禍

福との関係——因果応報などの問題に廬山在住三十年の努力があったこともこれを示すものである。中国の古典に対してそのような立場をとればとるほど、慧遠やその弟子たちの日常生活は一層僧侶としての戒律の厳守が要求された。翻譯された戒律だけでなく、中国の土地や人にふさわしい新戒律の設定も要求された。師道安にも僧尼の日常生活を中国風に規律した僧尼規範仏法憲章三ヶ条があったし、慧遠にも法社節度序とか比丘尼節度序などの中国僧侶の日常生活規則についての序文のあったことが知られ、また特にそれらは「遠規」とも称されたことはよく知られている。慧遠やその弟子たちの日常戒律生活の実践、僧風の肅正のきびしさは、今日、僧といいながら僧風の地に堅ち、法然上人の申された「戒において戒をも保たず」無戒の戒などという言葉に甘えている私どもにとってまず三省すべきことである。

(三)

この頃の北シナは五胡十六国時代とよばれ、外民族が漢民族を圧迫していた。長安に都していた前秦（苻氏）は西紀三七六年（我が仁徳天皇六十四年）には北シナを統一し、その余威をかって一挙に江南の東晋王朝を打倒しようとした。有力な外護者の興亡のはげしさを目前にして数百人の教団の生活を維持することは不可能であった。たまたま道安は襄陽を

陥した荷堅に招かれて長安に移り、ここに慧遠らは道安との二十五年の師弟生活に別れを告げ、さらに南方に安全の地を求めて揚子江を渡り、遂に風光明媚な廬山の地に永住することとなった。これは東晋孝武帝太元九年（三八四）頃と思われる。

もともと廬山は景勝の地のこととて、隱逸を好む知識階級の多く集る場所でもあった。然しその地形からみても慧遠教団が自活できる場所ではなく、当然有力な檀越（外護者）の援助を要とした。東晋王朝の実力者で後に帝位を盗もうとした相玄（三六九—四〇四）もその外護者の一人であった。慧遠が「沙門不敬王者論」を作つて、僧侶が世俗の権力者である王者に敬礼をしない理由を明かにしたのは慧遠より三十五才も年下の若い実力者桓玄が「沙門というものは恩愛を棄てその肉体を毀け（髪を剃り）おいしいものを食はず粗末な衣服を着て山に棲み、石を枕として修行を積み、たとえ僅かの間でも仏をまのあたり見たてまつろうとすべきなのに、外形だけは沙門の格好をしているが、心の中では名利にとらわれていることは俗人以上だ」として、慧遠に還俗を勧めたことなどがその発端となっている。沙門不敬王者論の発表は、白痴にもひとしい安帝を頂いた東晋王朝が振わず、覇者桓玄が武力を以て正統の王朝を奪おうとする醜い現実を直視して、

ますます厳肅な戒律生活に努め世俗の中で未だ仏の確化を受けていない人口を教化したいという慧遠の高尚な理想と自信とを表現したものであろう。

日常生活では比較にならないルーズさを持った鳩摩羅什ではあつたが、慧遠はこの西方の大乗仏教を伝えた大翻訳家に対し遠く長安に弟子を遣し大乘要義について疑問を提出した。これは後の「大乘大義章」として中国初期仏教学解明の上の重要な資料となっている。また常時の中国思想界に大きな問題となった因果応報の説について、慧遠は次のように考えた。目に見えぬ応報の道理は、遠い昔に定まっていた宿命は繞り続いている。善行を積んでも福が得られず、悪行を重ねても禍を受けない場合があつて、此の世に神も仏も在るものかと愚者を惑わせることがある。それは新訳の阿毗曇心論によると、応報には善惡の業が此の身に始まつて此の身にその報を受ける（現報）、来生に受ける（生報）、二生三生百千生の後に受ける（後報）などの三種があり、先後の違いはあるが、然し総て事に随つて報があり、感応の仕方に強弱の差があるために報に軽いと重い差が出てくる。だから目前の事だけを見て因果の理報が正しく行われていないと速断するのは誤りである。だから深妙な仏法を体得し、心を仏門に洗ひ清め、一挙に仏理を感得した高い境地に昇りつめた人は、宿

世のつみがどれだけ積み重なっていても、それを超越した世界に住んでいるから、もはや三報を受けることはない。然しその境地に達するのは余程達識の人でなければ不可能だという。このような慧遠の見解は、結局無知な庶民の救済を絶ちきったもので、やはり慧遠やその常時の廬山教団の構成によっても知られるように、近よりがたくきびしい学解の障壁を設けていたことが知られる。これは無知の凡夫われわれを対象とする真の浄土教となり得ないものであった。

慧遠の廬山三十年の生涯で、私たち浄土教徒にとって最も印象深く、又それ故にこそ中国浄土教の祖師と称される所以は、いう迄もなく白蓮社という念仏結社のことである。東晉安帝元興元年（四〇二）七月に般若台精舎の阿弥陀仏像前において宗炳、劉遺民、雷次宗など僧俗一百二十三人が集って念仏し西方往生を願ったことである。道場前に浄池を掘り白蓮を植えたことからその名が出たというがこれは後の訛伝であろう。実際に白蓮社の名が文献に出てくるのはずっと後のことである。さきの因果応報の考え方を基盤として、このような因果応報のきずなから離脱し超越し得る般若の智を体得することを可能ならしめるために、道德生活を守り浄らかな来世への希望、不滅の仏への景仰を持ち続け、今日の不安をのりこえようと励むそのための念仏である。然しこの念仏は

口称専念の念仏ではない。中国浄土教經典最初の翻訳と思われる後漢の支謙訳の般舟三昧經（ハシユサンマイキョウ）（十方現在仏悉在前立定經）によった念仏である。般舟（Pratyuppanna）とは「対して近く立つ」、この般舟三昧に入り、法堂に集って心を洗い清め思を専一にして想をしずめるならば、阿弥陀仏を始めとする十方の諸仏が悉く行者の前にあって近く立つのを見えるという。いわゆる定中見仏である。一度仏を見て得た感悟は、久しく我が身に習慣づけられた煩惱をとり除き深い迷いをたきることができるというのが、慧遠の念仏三昧である。この三昧に入るには深い思索と知識を必要とする。念仏結社の同信百二十三人は当然専門的な中国古典の教養を身につけ隠逸を享受し得るほどの経済的基盤も持った知識階級や学解修行のならばすぐれた僧侶であった。蓮社誓文を書いた劉遺民のごときは厳に仏戒を保ち専念坐禪すること半年に亘り定中に仏を見、行路に仏像に会い、仏が空中に現じてその光が天地を照して金色に輝くのを観じたと記しているほどである。かくて廬山の念仏結社は隠逸方外的な仏教者の集りとなって、愚迷の凡夫の真に救済を求める人々との間に深い溝を造ってしまったのである。慧遠の死後約六十六年に生れた曇鸞大師の浄土宗は北シナで流行したが、慧遠の影響は全く認められない。

わが浄土宗では宗戒兩脈を受け、宗学の蘊奥を究めた僧侶の法号にまで蓮社号を冠する。これは二祖鎮西上人の弟子宗円が天福元年（一一三三）に入宋し、たまたま廬山東林寺で善導大師の弥陀義を見、歓喜のあまりこれを書写しようとしたが許されず、止むを得ずその要照を謄記した。帰国ののち大いに浄土宗の宣布に努め、廬山蓮社の芳躅を慕って自ら白蓮社と号したことに由来すると言われる。もちろんその名のみを伝えたもので、般舟三昧の念仏を伝えたのではない。然し今日ではなおその風を承けて必ずしも宗学の蘊奥を究めなくともみだりに蓮社号を冠することは周知のところである。このように、我が浄土宗にとっては教義の上からはいわば無縁の祖師ながら、なお西方往生を願った大導師として、浄土教にあっては最も重要な祖師の一人である。他にも多くの浄土教の大先達がおられながら、蓮宗開祖として、中国浄土教史の第一人者に挙げられるのは、仏の戒律のみならず、土地に相応した制規（清規）までもうけて清浄厳肅な沙門の生き方に終始した生活の清らかさと、廬山という幽邃な自然の環境、その場所にふさわしい念仏結社の実践が、後世の中国や日本の浄土教者に大きな希望とあこがれを抱かせたからであろう。慧遠がその臨終にあたって、なおかつ弟子の勤める漿を飲むことが、律にそむかないかどうかを案じて、律文を検べさ

せ、その未だしらべおわらない間に息絶えたという「梁高僧伝」の記事は、少くとも僧侶と称する私どもにとっては、まさに頂門の一針というほかはない。今日の時代にふさわしい新戒律運動という大きなことではなしに、積極的な職場でのそれぞれの活動とともにせめて一つ、自分の戒を保ち続けてゆきたいものである。

新刊のおしらせ

法然上人 御遺訓 一枚起請文講話

大正大学教授 村瀬秀雄著

新書版 九〇頁
定価 一二〇円
送料 二〇円

目次

- | | | |
|----|-------------------------|-------------|
| 一 | 一枚起請文とは
念仏の奥義書 | 三つの
特色 |
| 二 | 観念の念仏を排す
観像念仏を排す | 観相
は無益 |
| 三 | 聖道はあり得ない
学問と信仰 愚痴に還る | 学問と信仰の念仏を排す |
| 四 | 信仰の目標 凡夫と往生の目標 | 生極楽世界 |
| 五 | 本願念仏を申す
他力の念仏 阿彌陀さま | 他力の念仏 阿彌陀さま |
| 六 | ひらに信ずる
念仏に勝劣なし | すけ |
| 七 | すべてを包含する
真実な心 深く信ずる | 心 一切を向ける心 |
| 八 | 二尊の前に誓う
只一向に念仏すべし | 愚鈍の身になして 尼 |
| 九 | 入道に同じ 只一向に
念仏すべし | 念仏すべし |
| 十 | 遺訓にはげむ
添書と奥書 病床の法 | 然上人 上人のご日常 |
| 十一 | あとがき
ご法語索引 | |

発行所 法然上人鑽仰会へ

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田

編集後記

▽新年おめでとうございます。浄土の信仰がますます深まりますとともに、本誌の発展をともしにねがいたいと思います。ご協力下さい。

▽本号は法然上人を新しい角度から再見してみました。祖師方をときどきとりあげてみたいと思っております。

▽二月号は近代高僧ものがたりを特集する予定です。

39年度版ひめくり

心の歩み

B判 17枚綴
・日曜表付・

価格 70円 丁 30円

10部以上 単価 63円

50 " " 60円

100 " " 55円

(送料は実費)

お申込みは鑽仰会へ

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 正月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年十二月廿五日印刷

昭和三十三年一月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番